

解題と考察



『東海道名所図会』と生活絵引

福田 アジオ

1 名所図会の流行

『東海道名所図会』は寛政9年（1797）に刊行され、ベストセラーになった名所案内書である。これが編纂され、刊行されるには前史があった。

安永9年（1780）に『都名所図会』5巻が刊行された。作者は秋里籬島で、絵は竹原春朝斎、出版元は京都の吉野屋為八であった。京都の市中と郊外の名所旧跡を案内する地誌であるが、それまでの各種案内書と異なり、多くの挿絵が挿入されていた。それまでの案内書に入れられた挿絵は稚拙かつ粗雑であり、具体的なイメージを描くことは困難なものであった。『都名所図会』に挿入された挿絵は原則として見開き2ページに描かれており、一枚一枚が大きく、詳細であり、やや高い地点からパノラマ風に描くことが多く、あたかもその場にいるかのような臨場感を与えるものであった。しかも挿絵の数は多く、数ページに1枚の割合で挿入されていた。案内の文章と挿絵が等しい位置づけであったといえる。

観光地ともいべき名所旧跡案内の書物はすでに近世前期から刊行されていた。京都に関する案内書としては明暦4年（1658）刊行の『京童』である。もっぱら京都市中の名所旧跡を取り上げ、挿絵も入れ、人々に京都案内をしていて、多くの人々に受け入れられた。同様に、江戸の案内書も刊行された。しかし、その挿絵は稚拙で簡単であり、対象をイメージさせる力は弱かった。それに対して、『都名所図会』は大きく異なった。そのことを作者自ら巻頭の「凡例」で以下のようにわざわざ断っている。

一、図中に境地広大なるところは究めて細画なり、狭少なる神祠・小堂はまたしからず、故に図毎に人物あり、形容いたつて微少なる人物は、そ

の地広大とするべし、形容微少ならざるは境地狭少なり、譬へば加茂社と野宮との境地を知らすの便なり

一、図中の間に人物の大画あり、四時の佳観を賞して遊楽の地を知らせんためなり、洛東の花見、宇治蚩狩等なり

このように凡例で図について説明しているように、図会は詳細な絵を挿入するところに特色があった。しかも風景だけでなく、風景の中に必ず人物が描きこまれ、しかも人々の動きが、大きく、詳細に描かれているものも少なくなかった。その絵を見て、実際に現地に赴けば、そこには絵に描かれた風景や状況が存在することが確認できた。行楽や旅の案内書として、現代であれば写真が多用されるが、それに相当する役割を果たしたのが豊富な挿絵であったといえよう。

『都名所図会』は評判となり、ベストセラーとなった。天明7年（1786）には『拾遺都名所図会』が刊行された。『都名所図会』の一種の改訂版ともいえるが、全体として挿入された図が、対象に迫って大きく描く傾向があり、それだけ詳細なものとなっている。またそれまでの名所旧跡という通念で把握される場所だけでなく、祭礼や年中行事も挿絵として描いており、より人々の生活への関心が強くなっているといえよう。

名所図会という言葉は、『三才図会』、『和漢三才図会』からヒントを得て、作者秋里籬島によって書名に採用されたものと思われる。中国の『三才図会』もそうであるが、正徳2年（1713）に刊行された寺島良安の『和漢三才図会』は絵入りの辞書である。取り上げたほとんどすべての事項に具体的な絵を添えている。しかし、それは辞書であることから、単

語に対して一つの事物を単体で描くものであった。それを事物単体でなく、関連する事物を配して全体的関連を示そうとした挿絵を多く挿入した『日本山海名物図会』が半世紀ほど後の宝暦4年(1754)に出されて、図会のイメージは新しいものとなったといえる。絵を見てイメージを膨らませ、対象を理解するというのが次第に一般化してきたと考えてもよいであろう。

そのような動きを決定づけたのが『都名所図会』である。大いに売れ、版を重ね、また増補版ともいうべき拾遺まで出された。そして名所図会の時代が始まった。多くの名所図会が編纂され、刊行された。その主要なものを列記すれば以下ようになる。

- 『大和名所図会』秋里籬島 寛政3年(1791)
- 『住吉名所図会』秋里籬島 寛政6年(1794)
- 『和泉名所図会』秋里籬島 寛政8年(1796)
- 『摂津名勝図会』秋里籬島 寛政8年(1796)・寛政10年(1798)
- 『伊勢参宮名所図会』著者不詳 寛政9年(1797)
- 『近江名所図会』秋里籬島・秦石田 寛政9年(1797)
- 『東海道名所図会』秋里籬島 寛政9年(1797)
- 『河内名所図会』秋里籬島 享和元年(1801)
- 『久波奈名所図会』長円寺義同 享和2年(1802)
- 『木曾路名所図会』秋里籬島 文化2年(1805)
- 『紀伊国名所図会』高市志友他 文化8年(1811)
- 『江戸名所図会』斎藤月岑 天保5年(1834)
- 『尾張名所図会』深田正韶 天保15年(1844)

名所図会という編纂方式を開発した秋里籬島は京都から始めて、大和、和泉、摂津、近江と畿内各地の名所図会を立て続けに編纂した。いずれも特定地域の名所旧跡を記述し、豊富な挿絵を挿入したものである。それらはどれもベストセラーになったようであるが、さらに新しい構想を得て編纂したのが寛政9年(1797)刊行の『伊勢参宮名所図会』と『東海道名所図会』であった。一定範囲の地域ではなく、出発地から目的地までのコースに沿って、旅の途次に立ちより見物するための名所旧跡を紹介する案内書であった。この新機軸の名所図会はまた大いに評判となり、多くの読者を獲得した。

2 『東海道名所図会』の内容

『東海道名所図会』全6巻は寛政9年(1797)に刊行された。作者は秋里籬島、版元は京都の田中庄兵衛他であった。京都を出発して、東海道を下って江戸にいたる道筋の名所旧跡や有名な寺社を取り上げ、その地の説明をすると共に、重要と思われる場所については挿絵を挿入して、具体的なイメージを読者に与えようとしている。挿絵は全部で200点に及ぶ。6巻の構成は、巻1が京都から膳所まで、巻2は石山寺から尾張阿波手まで、巻3は宮から袋井まで、巻4は遠州秋葉から富士川まで、巻5は吉原から平塚、そして巻6が江の島から江戸までとなっている。著者は京都に住む人間であり、出版したのも京都の書肆である。必然的に京都に近い近畿地方から東海地方にかけての記述が詳細で、京都から遠ざかると次第に簡単になる。京都から遠いから記述が少なくなるのではなく、名歌に歌われる場所が少なく、また歴史的イベントがあったところも少ないという事情によるものであろう。購読者がまた上方の人々であろうと予想されたことも関係しているであろう。東海道の全部を秋里籬島自ら踏査して、場所を確認し、関連する記事を古典からも豊富に引用して、具体的に書き記している。その知識は相当程度深いものがあつたと言ってよいであろう。

著者の秋里籬島は名所図会という方式の案内書・地誌を開拓し、定着させた人物であるが、その伝記について詳細に記述できる材料を持っていない。京都に住み、読本を書き、また俳人でもあつたという。生没年や出身は不明である(竹村俊則『秋里籬島と『都名所図会』』『日本名所風俗図会』8、1981)。しかし、住所や生年を暗示する記事を自ら書いている。彼の一連の名所図会の最後の著書になるとされる『木曾路名所図会』(1805)の巻1に「洛の南。風すさふ賀茂の流れのすゑ宣風坊の橋のほとりなる。河原院塩竈てふ古跡籬島の庵に年久しく住て」と記して、京都の河原院塩竈近くの籬島に居住することを明らかにしている。この場所については、『都名所図会』巻2(市古夏生・鈴木健一校訂『都名所図会』1、1999)で河原院の旧跡を説明し、そこに「いま

五条橋の南、鴨川・高瀬川の間には森あり。これを籬の森といふ。河原院の遺跡なり」と注記している。現在の京都市下京区の五条大橋西側を南側に下った所と推定できる。そして、同じく『木曾路名所図会』で「よはひは古稀に近づきて鬢の霜厚く眼は春の夜の朧となりても(中略)とし享和二のとしの夏卯花月中の六日といふ日に旅立ちぬ」とも記しており、享和2年(1802)に70歳近くになっていたことが分かる。逆算すれば、1730年代の生まれということになろう。没年も不明であるが、最後の作品と考えられる『秋里随筆』が文化7年(1810)に刊行されているので、その後しばらくして没したものと思われる。名前の籬島は、住んでいた場所が籬島で、それにちなんで号を籬島としたようである。名前は仁左衛門、号は秋里籬島、籬島軒、俳号は斑竹だったという(鈴木健一「秋里籬島・竹原春朝斎略伝」市古夏生・鈴木健一校訂『新訂都名所図会』5、解説、1999)。

『国書総目録』には、秋里籬島の著書として45が収録されている。もちろんその多くは名所図会であるが、それ以外に『絵本年代記』(享和2年)、『教訓安楽問答』(享和3年)、『源平盛衰記図会』(寛政6年)、『絵引節用集』(寛政8年)、『絵本朝鮮軍記』(寛政12年)、『俳諧早作伝』(安永5年)、『忠孝人龍伝』(天明2年)、『秋里随筆』(文化7年)などが掲げられている。幅広い著作活動をしたことが知られるが、そのなかに絵本、絵引、図会など図像を加えたことを重視する書名が多く、単なる挿絵ではなく、図像を著作の重要な要素として考え、重視していたことが分かる。それは多くの名所図会を著したこととも関連するであろう。文字を用いて書くのは自分であるが、具体的なイメージを与える写実的な図像を挿入することの効果を知っていて、絵師と組んで、図像を豊富に取り入れた書物を著すことを考え出したものと推測される。

『東海道名所図会』は、東海道五十三次の各宿場についても記述はするが、宿場そのものの記事は大部分がごく簡単なものである。まして旅籠の紹介、宿泊料、渡しの経費などを教えるような記述はない。その意味では、この本を手にしても旅はできない。

取り上げているのは、和歌にうたわれたような名所であり、それらの場所をうたった歌を挿入して紹介し、また歴史上の出来事の舞台となった場所を取り上げて、歴史的な事件を説明すると共に、想像図でその事件を描いて入れている。そして、取り上げた場所は、東海道の街道筋だけでなく、街道から離れたところも少なくない。遠州秋葉山や相模の大山などはその代表である。東海道を旅しつつ、そこから足を伸ばして山中の名所へも誘おうとしている。

しかし、それ以上に注目されるのは、各地の特産物の販売や生産の様相、また各地の祭礼行事などが記述され、挿絵を加えて詳細に描き出されていることである。現在ではその面影もないが、江戸に近い大森海岸はかつて浅草海苔の生産地であった。冬の寒い時期に、海に入って海苔を採取してから、それを天日に干して商品にするまでの過程を詳しく記述し、またそれに対応する図を4ページにわたって掲載している。

3 名所図会の挿絵

書名が図会となっているように、『東海道名所図会』には199枚の挿絵が挿入されている。全6巻の文章はすべて秋里籬島の筆になるが、挿入された絵は一人の作品ではない。「凡例」で「画図は京師、江戸および諸邦の寄合書なり、故に画ごとに姓名印章あり、細図は浪速竹原春泉斎の一筆によりて姓名を記さず」と記載している。「寄合書」という方式、すなわち複数の絵師の競作となっているのである。この絵師の描き方の相違がまた本書を興あるものに仕立て上げているとあってよいであろう。名前が登場する絵師は30人に及ぶ。もっとも多くの絵を描いたのは竹原春泉斎である。春泉斎は、『都名所図会』の挿絵を担当した竹原春朝斎の子である。春泉斎は実景を見事に描き出している。特に近景では、その写実性は大きく、父親同様に魅力ある多くの挿絵を挿入している。東海道の全行程で春泉斎の絵を挿入しているので、秋里籬島の取材旅行に同行していた可能性もある。その他に下川辺雅恵も比較的多く描いており、しかも京都から近江にかけてだけで

表1 『東海道名所図会』挿絵の描写方法分類

描写方法	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	計
①上方からの俯瞰図	17	23	19	20	16	22	117
②歴史的事項の想像図	5	3	9	3	7	8	35
③対象に迫る近景図	8	14	7	4	5	4	42
④事物のみ単体描写	2	2				1	5
計	32	42	35	27	28	35	199

※2ページ見開きの絵は1枚と計算した。

なく、鎌倉の建長寺なども描いている。やはり東海道を歩いたのであろう。また有名な円山応挙も園山主水という通称で逢坂山を描いている。その他、法橋中和、山口素絢、土佐光安、石田友汀などの名前が示されている。

他方、特定の範囲のみの絵に登場する名前もある。その代表は、鋏形蕙斎である。図には蕙斎、蕙斎政美、政美などと記されている。現在の横浜市になる神奈川から、玉川、矢口渡、大森、海苔採取、海苔生産、御殿山、高輪など総てを描いて江戸日本橋に達している。鋏形蕙斎は宝暦14年（1764）生まれであり、『東海道名所図会』が刊行された寛政9年（1797）にはまだ30歳余りであった。浮世絵師であった蕙斎は北尾政美を名乗っていたが、寛政6年（1794）に津山藩のお抱絵師となり、鋏形蕙斎と改称した。改称後まもなくの作品がこの『東海道名所図会』の挿絵ということになる。鋏形蕙斎といえば江戸鳥瞰図の作者として有名であるが、名所図会にも挿絵を多く描いているのである。その他、東海道の途中の場面では、それぞれの地方の絵師が起用されている。

挿入図199枚を分類してみると、①上方から対象を俯瞰するようにして名所を描いた絵が117枚、②名所で起こった歴史的出来事を想像で描いた絵が35枚、そして、③対象に迫り、近景から詳細に描き、特に人物を詳しく描いたものが42枚、④その他風景ではなく事物のみを描いたものが5枚となっている。やはり名所図会としての目的を117枚の風景描写で示しているといえよう。挿絵の58%を占めている。また歴史的イベントの想像図が35枚ある。印象では多いように見えるが、数量的には18%である。

『東海道名所図会』の特色は風景を遠景俯瞰図と

して描くだけでなく、対象に迫って人物を大きく描く近景図を多く挿入していることである。これは作者の秋里籬島の構想によるものと思われる。籬島の第一作『都名所図会』にも多くの近景図がすでに含まれていた。あるいはこの評判が良く、それ以降も近景図を挿入して、『東海道名所図会』にいたったものと思われる。『東海道名所図会』における近景図は全部で42枚で、全体の21%になる。近景図の挿入されている巻を見ると、もっとも多いのが巻二で14枚、この巻の挿入絵42枚の33%を占める。次いで巻一の8枚、25%、巻三の7枚、20%である。そして相模から江戸を記述する巻六ではわずかに4枚、11%に過ぎない。西高東低がはっきりと示されているのも興味深い点である。近景図には必ず人物が大きく描かれている。それらは写実的である。しかもそれは特別畏まった姿ではない。日常的生活のスタイルが示されていて、見る人に親しみを感じさせるものがある。鳥瞰的な風景図のなかにこのような近景図が挿入されることで、東海道各地が親しみのあるものに感じられたのではなかろうか。『東海道名所図会』は、この近景図を挿入することで人間味のある書物となった。

その近景図を挿入した独創性は大きく、はるか離れた土地の暮らしや状況を具体的に示してくれた。その描写は十返舎一九の『金草鞋』や『東海道中膝栗毛』にも影響を与え、また東海道各宿を描いた広重の絵の構図にも類似のものがある。逆に言えば、『東海道名所図会』の挿絵には、オリジナル性が大きく、資料的価値も高いと言える。

4 名所図会による絵引編纂

いうまでもなく、絵引は財団法人日本常民文化研究所が編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』が作り出した新しい編纂方式である。その編纂を主導した渋沢敬三は「絵引は作れぬものか」（1954）という短文を発表し、「字引とやや似かよった意味で、絵引が作れぬものかと考えたのも、もう十何年前からのことであった。（中略）画家が苦心して描いている主題目に沿って当時の民俗的事象が極め

て自然の裡にかなりの量と種目を以て偶然記録されていることに気がついた」と述べた。絵画に描かれた事物から情報を引き出そうとしたのが『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻である。古代・中世の絵巻物を素材に、その絵巻物の物語性やテーマとは関係なく、そこに偶然にも描き込まれている人々の行為や事物を取りだし、それを見出しとして、事物や行為の名称を示すといもうのであった。字引ではなく、絵引を編纂するという全く新しい試みであった。それまでも辞書編纂方式として図解という方法は採用されていた。図解は辞書編纂のために書き下ろされた図であり、しかも単語に対応した事物のみ単体で描くのが基本であった。それに対して、過去に描かれた絵画を用いることで、特定の時代性を獲得し、そして単体ではなく関連した事物や行為、あるいは場所を示すことで、その全体性・関連性を確保するものであった。本書はそのような『絵巻物による日本常民生活絵引』の特色を継承発展させ、時代を近世にとって、絵引編纂を行った。『日本近世生活絵引』として編纂を始めた一冊が、名所図会による絵引編纂の試みであった。

『東海道名所図会』による絵引編纂は以下のような手順で進められた。

1. 『東海道名所図会』全6巻に挿入されている挿絵約200点をスキャナで読み込み、デジタル画像フ

ァイルとする。

2. 200点の図像のうちから生活に関わる情景が描かれている図50点を選択した。描写方法別の分類の近景図が主として選択の対象になったことはいうまでもない。

3. 各絵のなかに描き出された事物や行為をできるだけ多く取り出し、それらに番号を付け、その名称を付ける。名称はできるだけ近世に用いられた言葉を付ける。関連資料によって確認しつつ記入し、その根拠となった出典を明示する。

4. キャプションを付ける過程で、絵に示された主題を決め、それに関係が弱い部分を省略する形で切り取る。

5. 主題を中心に、描かれた図柄全体を読み取り、その意味を説明すると共に、それとの関係で個別事物についても解説する。

6. 見開き2ページに1枚の絵を入れ、絵・キャプション・解説文を割り付ける。

7. 絵50枚によるA4判100ページの試案本として完成させ、『日本近世生活絵引』東海道編として印刷公刊する。すなわち、本書である。これは完成品ではない。試みとして作った、私たちが言う「試案本」であり、今後種々補訂を加えなければならない性質のものである。

(ふくた・あじお)